

古ウパニシャッドと初期仏教

— *Chāndogya Upaniṣad* VIIを中心として —

橋 本 一 道

目次

0. はじめに
1. 古ウパニシャッドにおける苦の観念の諸相
 - 1-1. *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IVにおける苦の観念
 - 1-2. *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad*、*Chāndogya Upaniṣad* における苦の観念
2. *Chāndogya Upaniṣad* VIIにおける苦の観念
 - 2-1. *Chāndogya Upaniṣad* VIIの概要
 - 2-2. 苦の観念
3. 初期仏教における苦の観念との比較
4. おわりに

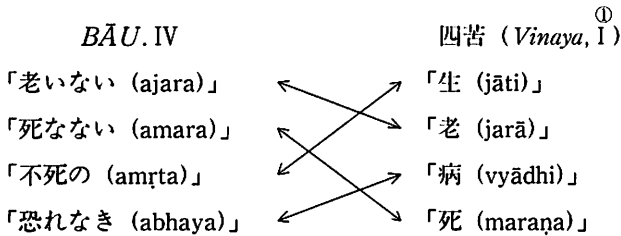
0. はじめに

古ウパニシャッド（以下 *Up*）の思想と初期仏教の思想は、我（＝アートマン）を認めるか否かという根本的な部分で見解を異にしており、*Up* の思想は仏教では外道（*tīrthika*）の一つとして批判されている。そして仏教もまた、*Veda* 聖典の権威を承認する者たちからナースティカ（*nāstika*、異端派）などと批判される。しかし、中村 [1974, p. 8] に述べられるように両者の教説には類似する部分が多く、それらは単なる文章上の類似としてしまえるほど単純なものではない。そのような表現を一つ一つ精査し、その上で両思想間にどのような関連性があるのか、あるいは本当に単なる文章上の類似にすぎないのかを検討する必要がある。

本稿では、*Up* の思想と初期仏教の思想との関係に関する一つの見方を提示する。それにあたり、両思想において克服すべきとされる苦の観念に着目する。*Up* の苦の観念は、正しい知を得た者が到達する境地において否定されるものとして、あるいはアートマンやブラフマンの形容表現によって否定されるもの（以下これを「アートマンの形容表現」と呼ぶ）として現われる。一方、初期仏教の苦の観念はブッダが説く四苦に代表される。このように、両思想におい

で共通して、重要な教説の中で苦の観念が見られるのである。本稿では、特に *Chāndogya-Upaniṣad* (以下 *ChU*) に見られる苦の観念に着目して、*Up* の思想と初期仏教の思想の関連性について考察する。

両思想の関係について、*Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad* (以下 *BĀU*) に着目した研究として後藤 [1996] がある。後藤氏は *BĀU*.IV に見られるアートマンの形容表現である「老いない (*ajara*)」、「死なない (*amara*)」、「不死の (*amṛta*)」、「恐れなき (*abhaya*)」と、初転法輪の教説中に見られる四苦、すなわち「生 (*jāti*)」、「老 (*jarā*)」、「病 (*vyādhi*)」、「死 (*marāṇa*)」とを比較した。そして、アートマンの形容表現とブッダの四苦は肯定・否定の関係で対応するとした。



以下ではまず、*BĀU* と *ChU* に見られる上記以外のアートマンの形容表現から、両 *Up* において何が苦であるとされていたのかを概観する。その上で、筆者が特に着目する *ChU*. VII における苦の観念について取りあげる。*ChU* は成立時期が *BĀU* とおおよそ同じ頃であり、分量も *BĀU* に次ぐ長編である。また *BĀU* と同様に「五火二道」の思想や「梵我一如」の思想といった内容を含むため、*Up* の研究を行うにあたっては *BĀU* と並んで重要とされる。

その *ChU*. VII に見られる苦の観念は「正しい見解を持つ人は死を見ない。病気を見ない。苦しみもまた見ない」というように表される。ここでは直接的にアートマンの形容表現として説かれているわけではないが、死、病気、苦しみを退けるべきものとして扱っている。そして、特に病気を苦と捉えている点が他の苦の観念と異なり、四苦の内の病苦との共通性を見出せるのである。この *ChU*. VII の苦の観念を、後藤氏の方法に倣ってブッダの苦の観念と比較する。

なお、両 *Up* を読解するにあたり、シャンカラ (Śaṅkara, 700~750頃) の註釈 (以下シャンカラ註) である *ChU.bhāṣya* (以下 *ChU.Bh.*) と *BĀU.bhāṣya* (以下 *BĀU.Bh.*) が現存する註釈^②ではおそらく最古のものであるため重要であり、こちらも参照した。

1. 古ウパニシャッドにおける苦の観念の諸相

1-1. *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IVにおける苦の観念

BĀU. IV, 1-4では、ヤージュニャヴァルキヤ (Yājñavalkya) がジャナカ (Janaka) 王に対してアートマンの教説を説く。この中でアートマンの形容表現として「老いない (ajara)」、「死なない (amara)」、「不死の (amṛta)」、「恐れなき (abhaya)」の四語が用いられる。

BĀU. IV, 4, 25^③

実に、このように偉大で不生のアートマンは、老いない、死なない、不死の、恐れなき、ブラフマンである。実に、ブラフマンは恐れなきものである。実に、このように〔ブラフマンを〕知っている者は、恐れなきブラフマンになる。

後藤氏は、この「不死の」について、「死というものをそもそも持たない」ではなく「一旦死んだ者が天界で再死することなく、従って地上に再生することがない」と解し、^④「死なない」と区別した。そして四苦の中の「生 (jāti)」について、本来輪廻の中での再生を意味していたと^⑤考え、*BĀU* の「不死の」と対応するとした。このことから、初期仏教に現われる世界観・人生観は *Up* の生死観を受け継いだ延長上にありつつ、*BĀU* のそれと比べると、輪廻に対する観念、思弁の一段階進んだ姿を示し、且つより普遍的に人間一般を対象とする性格が強い^⑥と述べている。

上記の形容表現について、シャンカラ^⑦はそれぞれ、「老いない」については「歳をとらないとは、変化しないという意味である」とし、「死なない」とは「老いないので、それ故に死なない、つまり死ぬことがないというのが *amara* である」とする。「不死の」については「不生であり、老いない、つまり不滅のものである」から「不死」であるとする。そしてこれらの「誕生を始めとする三つの状態の変化」を免れているから「恐れなき」としている。生まれること、老いること、そして死ぬことは恐れの対象であり、その恐れること自体もまた免れるべきものとして捉えられている。シャンカラの解釈によれば「不死の」とは「不滅 (*avināśin*)」であるため、四苦との対応という点では「生」苦には「不生 (*aja*)」が対応すると考えられる。そして *BĀU*. IVには「病 (*vyādhī*)」苦と対応する語は見られない。^⑧

以上が *BĀU*. IVにおけるアートマンの形容表現である。このように、アートマンの形容表現によって否定される「老い」などが *Up* によって克服すべき「苦」であると考えられる。以下ではこのような *Up* に見られる苦の観念のうち、*BĀU* と *ChU* における他の用例を検証する。

1-2. *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad*、*Chāndogya Upaniṣad* における苦の観念

上記のような苦を否定するアートマンの形容表現が *BĀU*、*ChU* 中で他にも見られる。各教説の表現には共通項も存在するが決して一様ではなく、この時点では四苦のように数ある苦の中でいくつかを特別視することはなかったのであろう。

管見の限り、*BĀU*. III, 5, 1、*ChU*. IV, 15, 1、VIII, 1, 5, 4, 1, 7, 1にそのような形容表現が見られる。

・ *BĀU*. III, 5, 1^⑨

さて、カホーラ・カウシータケーヤは彼（ヤージュニャヴァルキヤ）に尋ねた。「ヤージュニャヴァルキヤよ」と。〔カホーラ・カウシータケーヤは〕言った。

(カ)「眼前にあり、現前するブラフマン、つまり一切の内部にあるアートマンというものを、それを私に説明してほしい。」

(ヤ)「あなたのアートマン、それが一切の内部にあるものである。」

(カ)「ヤージュニャヴァルキヤよ。何が一切の内部にあるもののなか。」

(ヤ)「飢えと渇き、憂苦、痴、老い、死を越えるものである。実に、そのようなこのアートマンを知ってから、バラモンたちは息子を追い求めること、財産を追い求めること、世界を追い求めることを捨てて、そして食物を乞うて歩き回る。なぜなら、息子を追い求めることは財産を追い求めることであり、財産を追い求めることは世界を追い求めることだからである。なぜなら、それら2つこそが追い求めることであるからである。それ故に、バラモンは学識を捨てて、愚かさに留まるべきである。愚かさと学識とを捨てて、それから聖者となる。聖者でない状態と聖者の状態を捨てて、それからバラモンとなる。」

(カ)「彼は何によってバラモンたりうるのか。」

(ヤ)「それによって〔バラモン〕たりうるようなもの、正にそれによってそのようになる。それ以外のものは悩まされるものである。」

そこで、カホーラ＝カウシータケーヤは沈黙した。

BĀU. III, 5, 1では、カホーラ＝カウシータケーヤ (Kahola Kauṣitakeya) がヤージュニャヴァルキヤにブラフマンとアートマンの教えを請う。ここでは、アートマンの知を得たバラモンは息子、財産、世界（幸福な来世）を追い求めることを捨てて、乞食の生活を送るべきであるとされる。そして、ここでのアートマンとは「飢えと渇き (aśanāyāpipāsa)」、「憂苦 (śoka)」、「痴 (moha)」、「老い (jarā)」、「死 (mr̥tyu)」を越えるものである。

シャンカラ^⑩は「飢えと渇き」を「食べることを欲していること」「飲むことを欲しているこ

と」であるとしている。また、「憂苦」については「憂苦とは欲望 (kāma) である。求められる事物について考えている者にとって喜ばしくないもの、それは渴愛に支配された者にとっての欲望の種である。なぜなら、それによって欲望は燃え上がるからである」と述べ、「痴」については「誤った観念から生じるものであり、識別力の不足 (aviveka) であり、迷妄 (bhrama) である。そしてそれ (痴) は無知であり、一切の無益なものを生み出す種である」と述べている。「老い」とは「行為と器官の集合体の変化」であり、「死」とは「[老いという] 変化の終わり」であるとする。

・ *ChU.* IV, 15, ^⑪ 1

「眼において見られるプルシャ、それはアートマンである」と彼 (サティヤカーマ=ジャーバーラ) は言った。それは不死であり、恐れなきものである。これはブラフマンである。それ故に、もしそこ (眼) にバターあるいは水を注いでも、[上下の] まぶたの方へ向かうのである。

ChU. IV, 15では、サティヤカーマ=ジャーバーラ (Satyakāma Jābāla) がウパコーサラ=カーマラーヤナ (Upakosala Kāmalāyana) にアートマン及びブラフマンの教説を説く。

ここでは、アートマンは「不死 (amṛta)」であり「恐れなき (abhaya)」ものであると説かれている。後の *ChU.* IV, 15, 5において神道 (devapatha) の教説が説かれるため、ここでの「不死」は「輪廻を免れた」、つまり「再死しない」という意味であると考えられる。そしてそれ故に「恐れなき」ものとされる。

⑫
シャンカラはこの「不死」と「恐れなき」を関連づけて、「それは不死である。死なない特性を有する者は、正に不滅であるから、恐れなきものである」と解している。「老い」や現世における「死」にあたる語は見られないが、*BĀU.* IVのアートマンの形容表現と同様のものと思われる。

・ *ChU.* VIII, 1, ^⑬ 5

それ (ブラフマンの都城) の老いによってそれ (小さい白い蓮華の家) は老いない。それ (ブラフマンの都城) の殺害によってそれ (小さい白い蓮華の家) は殺されない。それは真実のブラフマンの都城であり、そこには諸々の欲望が含まれる。

そのような悪が打ち払われたアートマンは、老いから離れていて、死から離れていて、憂苦から離れていて、飢えから離れていて、渴くことなく、真実の欲望を有し、真実の意図を有する。

ChU. VIIIは「ブラフマンの都城 (brahmapura)」とその中にある「小さい白い蓮華の家

(dahara puṇḍarika veśma)」、さらにその内部にある「小さい内的な空間 (dahara antarākāśa)」の中にあるもの (=アートマン) についての教説である。「ブラフマンの都城」と「小さい蓮の花」はそれぞれ「身体 (deha)」と「心臓 (hr̥daya)」のことであるとされ、これは人間の身体におけるブラフマンとアートマンの教説であるとされる。

ここではアートマンは「老いから離れ (vijara)」、「死から離れ (vimṛtyu)」、「憂苦から離れ (viśoka)」、「飢えから離れ (vijighatsa)」、「渴くことなく (apipāsa)」、「真実の欲望を有し (satyakāma)」、「真実の意図を有する (satyasamkalpa)」ものである。*ChU. VIII*は人体におけるアートマンの教説であるため、これらは現世における人間の性質として捉えることができる。

シャンカラ^⑮はそれぞれ、「老い」とは「身体の変化」、「死」とは「殺害によって殺されること」、「憂苦」とは「求められたものなどに〔手が〕届かないことを原因とする心の苦痛」、「飢え」とは「食物を欲すること」、「渴き」とは「飲み物を欲すること」、「真実の欲望」とは「虚偽ではない欲望」、「真実の意図」とは「(真実の) 欲望を原因とする (真実の) 意図」であるとしている。

・ *ChU. VIII*, 4, 1^⑯

さて、アートマンというもの、それはこれらの世界が混合しないようにするための堅固な隔壁である。そのような隔壁を、昼と夜とは越えない。老い、死、憂苦、善行、悪行は〔越えない〕。一切の悪はそこから戻る。なぜなら、そのようなブラフマンの世界は、悪が打ち払われているからである。

ここでは、「アートマンは～である」という形式ではなく、アートマンという隔壁を老いなどは越えないという形式である。同じ *ChU. VIII*での教説なので、「老い (jarā)」「死 (mr̥tyu)」「憂苦 (śoka)」は *ChU. VIII*, 1, 5と同様ののものであると見て良いだろう。「善行 (sukṛta)」「悪行 (duṣkṛta)」については具体的に何かを示しているのではなく、アートマンは善悪を離れた純粋なものであることを示すために用いられていると考えられる。

シャンカラ^⑰はここでの「老い」「死」「憂苦」には特に註を付していないが、「善行」「悪行」については「正義と不正」であるとしている^⑱。また、本文の「越えない (na tarati)」に対する註釈でアートマンに「老い」などが無い理由を述べている。すなわち、アートマンは原因であり、その結果として存在する昼と夜などは原因を通り抜けることができないからであると解している。

・ *ChU. VIII*, 7, 1^⑲

「悪が打ち払われた、老いから離れた、死から離れた、憂苦から離れた、飢えから離れ

た、渴くことがなく、真実の欲望を有し、真実の意図を有するようなアートマン、それは求められるべきであり、それは認識しようとされるべきである。そのようなアートマンを徹底的に知り、認識する者は、一切の世界を獲得し、一切の欲望を〔満たす〕とプラジャーパティは言った。

ChU. VIII, 7は神々の代表として選ばれたインドラ (Indra) と、悪魔たちの代表として選ばれたヴィローチャナ (Virocana) とがプラジャーパティ (Prajāpati) にアートマンの教説を求める内容である。「古いから離れた (vijara)」などの意味については ChU. VIII, 1, 5のものと^⑨同じ意味であろう。

BĀU. III, 5, 1	飢えと渴き (aśanāyāpipāsa)、憂苦 (śoka)、痴 (moha)、老い (jarā)、死 (mr̥tyu) [を越える]
BĀU. IV, 4, 25	老いない (ajara)、死なない (amara)、不死の (amṛta)、恐れなき (abhaya)
ChU. IV, 15, 1	不死の (amṛta)、恐れなき (abhaya)
ChU. VIII, 1, 5	古いから離れた (vijara)、死から離れた (vimṛtyu)、憂苦から離れた (viśoka)、飢えから離れた (vijighatsa)、渴くことがない (apipāsa)、真実の欲望を有す (satyakāma)、真実の意図を有す (satyasamkalpa)
ChU. VIII, 4, 1	〔アートマンという隔壁を〕老い (jara)、死 (mr̥tyu)、憂苦 (śoka)、善行 (sukṛta)、悪行 (duṣkṛta) [は越えない]
ChU. VIII, 7, 1	悪が打ち払われた (apahatapāpman)、古いから離れた (vijara)、死から離れた (vimṛtyu)、憂苦から離れた (viśoka)、飢えから離れた (vijighatsa)、渴くことがない (apipāsa)、真実の欲望を有す (satyakāma)、真実の意図を有す (satyasamkalpa)

このようにアートマンの形容表現には種々のものが見られるが、「老い」と「死」がないことがほぼ共通している。「老い (jarā)」は文字通りの老化のことである。「死なない (amara、vimṛtyu)」は「不死の (amṛta)」と区別され、前者は現世における死が無いことを示し、後者は「不滅 (avināśya)」の意味である。「不滅」とはすなわち恒常であり、「輪廻を免れた」「あの世で再死しない (=再生しない)」という意味であろう。「憂苦 (śoka)」はシャンカラによると「欲望 (kāma)」が原因であり、「飢え (aśanāyā, jighatsā)」「渴き (pipāsā)」も合わせて欲望が満たされないことによる苦であると考えられる。

2. Chāndogya Upaniṣad VIIにおける苦の観念

ChU. VIIにおいて、「正しい見解を持つ人は死を見ない。病気を見ない。苦しみもまた見ない」という筆者が着目する苦の観念が見られる。この苦の観念は前述のようなアートマンの形

容表現ではなく、正しい知を得た者が獲得する果報によって否定されるものとして説かれる。そして上記の苦の観念と異なり、病気の克服が説かれている。

2-1. *Chāndogya Upaniṣad* VIIの概要

ChU. VIIは、ナーラダ (Nārada) がサナット＝クマーラ (Sanat Kumāra) にアートマンについての教説を求め、またそれによって憂苦 (śoka) を克服することを求める物語である。そこでは、リグ・ヴェーダに始まる種々の知識を身につけたナーラダがサナット＝クマーラに次のように言う。

ChU. VII, 1, 3^②

「尊師よ。そのような私は聖句を知っているのみで、アートマンを知らない。実に、尊師のような人々から私が聞いたことは「アートマンを知る者は憂苦を克服する」ということである。尊師よ。そのような私は嘆き苦しんでいる。尊師はそのような私を憂苦の彼方に渡らせたまえ」と。

ChU. VIIでは「名称 (nāman)」を始めとする様々なものの神格化が次々と説かれ、それらが段階的にまとめられている。シャンカラはこの *ChU*. VIIは此岸的な (arvāk) 変異を特徴とする諸々の真実を示すための教説であるとしている。^②

ナーラダは「神のごとき仙人 (devarṣi)」の代表と称されるほどのバラモンであり、*Veda* 文献中では教えを説く人物として登場することが多いが、*ChU*. VIIでは教えを求める立場である。そしてそのようなナーラダに教えを説くサナット＝クマーラは *ChU*. VIIのみで見られる特異な思想家である。^②

ChU. VII, 1は、最初にナーラダがサナット＝クマーラに教えを求めるところから始まる。ナーラダは、当時主要であった学問に通じていたが、アートマンの教説を知らなかった。それ故に憂い苦しんで、サナット＝クマーラにアートマンの教説を求めた。サナット＝クマーラはそのようなナーラダに対し、これまでに何を学んだのかを尋ねる。ナーラダは学んだ学問を伝えたが、サナット＝クマーラはナーラダが学んだことは「名称」にすぎないとした。そして、*ChU*. VII, 2において、「言語能力 (vāc)」は (名称を含む) 一切を知らしめるものであるため、名称より偉大であると説く。その後、「もっと偉大なものはあるか？」というナーラダの問いに答える形で *ChU*. VII, 15までにおいて、「X は Y より偉大である」というように、あるもの (Y) が生じる原因となるもの (X) は、そのあるもの (Y) より偉大であるという形で、偉大でないものから順次、意 (manas)、意図 (saṃkalpa)、思 (citta)、熟慮 (dhyāna)、認識 (vijñāna)、力 (bala)、食物 (anna)、水 (ap)、熱 (tejas)、虚空 (ākāśa)、記憶 (smara)、希望 (āśa)、生氣 (prāṇa) が説かれる。そして、この生気の偉大性を見、思い、認識するものは雄弁な者

(ativādin) になるとされる。

続く *ChU*. VII, 16において、雄弁な者となるのに必要な更なる条件として、真実によって語ることが必要とされる。そして *ChU*. VII, 17において、真実によって語るためには認識することが必要とされる。このように *ChU*. VII, 16～22において、雄弁な者となる諸条件として順次、真実〔を語る〕(satya)、認識する (vi-√jñā)、思う (√man)、信じる (√śraddhā)、〔物事を〕完成させる (niḥ-√sthā)、行ずる (√kṛ)、幸福〔を得る〕(sukha) が説かれる。

そして、*ChU*. VII, 23～25では、アートマンの教説の最終段階として「豊富 (bhūman)」という状態が説かれる。豊富とは *ChU*. VII, 1～22までの各教説を学んだナーラダが最後に学ぶものであり、*ChU*. VIIにおいて理想とされる境地である。つまり、豊富は *ChU*. VIIの教説を正しく知る者が到達する境地であり、これに対して教説を正しく知らない場合は「僅少 (alpa)」であるとされる。

2-2. 苦の観念

ChU. VII, 26は、*ChU*. VIIを総括する節である。*ChU*. VII, 26, 1^{②⑤}では、これまでの教説の総括として、*ChU*. VII, 22までに説かれてきた各項目はアートマンから生じるものであるということが述べられる^{②⑦}。またそれによって、これまで説かれてきた何ものよりもアートマンが偉大であることを示唆している^{②⑧}。続く *ChU*. VII, 26, 2で、*ChU*. VIIの締めくくりとして、一つの詩節によって教説を正しく知る者が獲得する果報が示される。

ChU. VII, 26, 2^{②⑨}

それについて、この詩節がある。

「正しい見解を持つ人は死を見ない。病氣を見ない。苦しみもまた見ない。

正しい見解を持つ人は、実に全てを見て、あらゆる点において全てを獲得する」と。

この内、「正しい見解を持つ人は死を見ない。病氣を見ない。苦しみもまた見ない」が克服すべき苦の観念であると考えられる。正しい見解を持つことによって、死、病氣、苦しみを見ない。つまり死、病氣、苦しみは見るべきものではなく、正しい見解を持つことでそれらを退けるべきであるということである。正しい見解を持つ人とは、*ChU*. VIIに示される教説を正しく知る人、すなわち豊富な状態である人のことであろう。そして *ChU*. VII, 25にて豊富はアートマンと同置される^{②⑩}。アートマンは個人の根本原理であるため、アートマンの教説を知ったこの者についての「死を見ない、病氣を見ない、苦しみもまた見ない」はアートマンの形容表現としても見ることができる。

この箇所について、シャンカラは以下のように解釈する。

ChU. Bh. VII, 26, 2^{②⑪}

さらにまた、それについて、この意味に関して、この詩節がある、聖句も存在する。正しい見解をもつ人は見ないとは、正しい見解を持つ人は、上述の見解を有する賢者は、という意味である。死と、死ぬことと、病気と、熱などと、苦しみを、苦しい状態をもまた見ない。実に、全てのものを、正に、全てのものを、彼は、正しい見解を持つ人は見る、実に、アートマンである一切を。それ故に、あらゆる点において全てを獲得する、あらゆる面で。

これによると、「正しい見解を持つ人」は「上述の見解を有する賢者」であり、つまり *ChU*. VII の教説を知る者である。そして「死」、「病気」、「苦しみ」は、それぞれ「死ぬこと (*marāṇa*)」、「熱など (*jvarādi*)」、「苦しい状態 (*duḥkhabhāva*)」のことである。

これを踏まえて「死 [を見ない]」、「病気 [を見ない]」、「苦しみ [を見ない]」について考察する。

まず「死」について、他の *Up* では現世における死を表すものとして使用されている。さらに、*ChU*. VII は此岸的な真実に重点を置いた教説である点、「病気」と同列に扱われている点から、あの世での再死ではなく現世における死を示していると考えられる。

次に「病気」について、これは文字通りの「病気」を指すと見られる。なお、管見の限りではあるが、*BĀU* と *ChU* 中で「病気」の克服が説かれている所はこの箇所と *ChU*. VIII 以外には見られない。^⑳

「苦しみ」については、シャンカラが「苦しみの状態」としているように、具体的に何かの苦しみを指しているのではなく、死と病気とは別に置かれながらも、あらゆるものを原因とする苦しみ一般を指すと考えられる。管見の限り、*BĀU*、*ChU* 内で他に *duḥkhatā* という語が用いられている箇所は見られず、*BĀU*. IV, 4, 14 において *duḥkha* が見られるのみである。^㉑ 中村 [1980, p. 11] によると「この膨大なヴェーダ聖典 (但しウパニシャッドを除く) のうちには、苦 (*duḥkha*) という語が一回も現れない」^㉒とある。*Veda* 聖典の時代には、人々は前述のような種々の苦しみを体験してはいたが、それらを一括りにした「苦」という概念が成立したのは、初期の *Up* の時代においてなのであろう。それ故に、この時点では仏教のように数ある苦の中から特に重要なものを取り出し、一思想として一括りにすることはなかった。そして、*Up* ではそれらの苦が無いとされるアートマンの知を得ることで、苦を免れることを求めていると考えられる。

3. 初期仏教における苦の観念との比較

初期仏教における苦の観念を代表する四苦は初転法輪の教説において見られる。以下では最も典型的な教説として *Vinaya*, I を参照する。^㉓

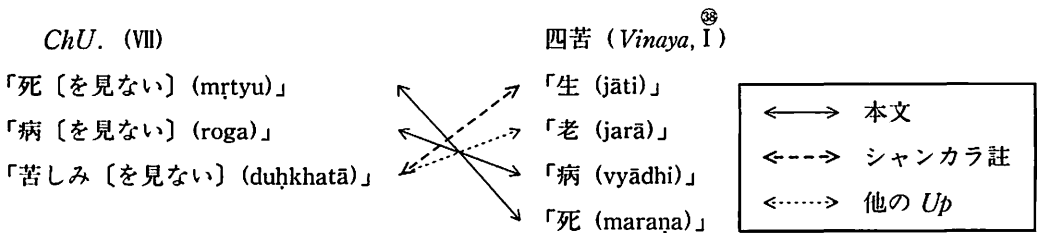
Vinaya, I, 6, 18^⑤

ところで、比丘たちよ。これが苦しみという聖者たちにとっての真実である。生も苦しみである。老も苦しみである。病も苦しみである。死も苦しみである。好ましくない者たちと出会うことは苦しみである。好ましい者たちと別れることは苦しみである。欲しているけれども得られないようなこと、そのこともまた苦しみである。要するに、五つの執着の素因の集まりもまた苦しみである。

ChU. VIIの苦の観念との関係については、まず「病」と「死」については「病氣〔を見ない〕」と「死〔を見ない〕」がそれぞれ対応する。しかし、ChU. VIIには「生」と「老」にあたる文言はない。よって、ChU. VIIのみから読み取れる苦の観念ではこれらの四苦とは完全に一致するとは言い難い。しかし、ChU. VIIの「苦しみ〔を見ない〕」は包括的な語であり、様々なものを原因とする苦しみ一般を指すものである。従ってそこには様々な苦が想定されているのであり、その中に「生」と「老」を見出し得るかどうかが肝要である。

まず「生 (=再死)」について、ChU. VII本文では再死あるいは誕生を苦とする文言は見られない。しかし、例えば ChU. Vの五火二道説では五火説を正しく知ることが神道を進む条件とされているように、Up では正しい知を有することは輪廻からの解脱の条件となる。また ChU. Bh. VII, 24, 1において、豊富の状態である者は輪廻しない^⑥と説かれている。豊富である者は正しい見解を持つ者であるため、その者が輪廻しないということは再死の苦しみを見ないということである。よって「苦しみ〔を見ない〕」には「生」の意味も含まれ得ると考えられる。

次に「老」について、これも同様に ChU. VII中には「老い〔を見ない〕」にあたる文言は見られない。けれども、前述の通りアートマンに「老い」が無いことを示す文言は他の Up では度々見られる。よって、「老い〔を見ない〕」も「苦しみ〔を見ない〕」に含意され得ると見てよいだろう。従って、「生」と「老」について、「苦しみ〔を見ない〕」がそれらを含意するものとして、シャンカラ註や他の Up から関係を補うことができると考える。



BĀU. IVでは「病」にあたる文言が見られず、ChU. VIIでは ChU の他の章における記述や、

シャンカラの註釈を参照することでようやく四苦との対応が見られる。その他の *Up* に見られるアートマンの形容表現も一様でなく、これらは四苦とすぐに一致するとは言い難い。

しかし、*BĀU*、*ChU* には仏教で苦とされる4つは既に一通り現れており、これらから推察される「苦」の観念は、ブッダが「苦」であるとしたものとおおよそ一致すると考えられる。その上で、*BĀU*、*ChU* において他に「病氣」の克服を説く例は少ないけれども、*ChU*. VII などにおいて「病氣」の克服が説かれていることは、初期仏教における苦との関連性を考察するにあたって重要な手掛かりとなるであろう。この点で、*ChU*. VII の苦の観念と初期仏教の苦の観念の共通性が見出せる。

ところで、上に見てきたような四苦であるが、この思想が定型化する前の段階では「苦」と見なされるのは生、老、病、死の4つではなかった。中村 [1974] によると、四苦の教説は以下のようなブッダの若かりし頃の反省に由来するという。

Āṅguttara-Nikāya (以下 *A.N.*), III, 38^⑨

比丘たちよ。私はこのように裕福で、またこのように究めて優美であることによって、この如く思った。

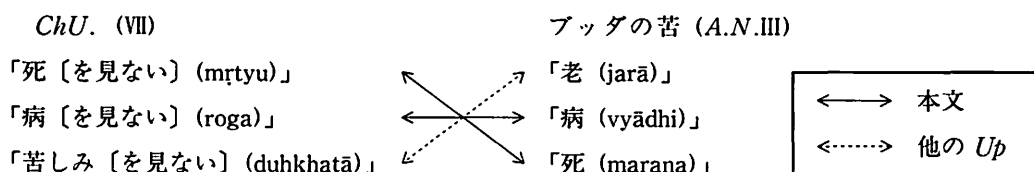
実に、無聞の凡夫は、自らが老いる者であり、老いを免れていない者でありながら、他の老いた者を見て悩み、恥じ、嫌う。実に自らを越えて。実に私もまた老いる者であり、老いを免れない者である。しかし、実に私は老いる者であり、老いを免れない者でありながら、他の老いた者を見て、悩み、恥じ、嫌うであろう。このことは私にとって相応しくない。比丘たちよ。そのような私について観察されたので、若い時の若さの驕りのようなもの、それは全て捨てられた。

実に、無聞の凡夫は、自らが病気になる者であり、病気を免れていない者でありながら、他の病気の者を見て、悩み、恥じ、嫌う。実に自らを越えて。実に私もまた病気になる者であり、病気を免れていない者である。しかし、実に私は病気になる者であり、病気を免れていない者でありながら、他の病気の人を見て、悩み、恥じ、嫌うであろう。このことは私にとって相応しくない。比丘たちよ。そのような私について観察されたので、健康な時の健康故の驕りのようなもの、それは全て捨てられた。

実に、無聞の凡夫は自らが死ぬ者であり、死を免れていない者でありながら、他の死者を見て、悩み、恥じ、嫌う。実に自らを越えて。実に私もまた死ぬ者であり、死を免れていない者である。しかし、実に私は死ぬ者であり、死を免れていない者でありながら、他の死者を見て、悩み、恥じ、嫌うであろう。このことは私にとって相応しくない。比丘たちよ。そのような私について観察されたので、生きている時の生きている故の驕りのよう

なもの、それは全て捨てられた。

ここでは、「老 (jarā)」、「病 (vyādhī)」、「死 (maraṇa)」についてのブッダの反省が見られる。中村 [1974] はこれが発展して四門出遊の説話が成立し、さらに後代になって教義学的反省が加わった後、「生」の苦しみが加わって四苦及び八苦の思想となるという。⁴⁹「苦」という語は明示されないけれども、初期仏教において四苦の観念が定型化するのに先行して、老、病、死が一括りにされ克服すべきものとされる段階が存在していたと考えられる。この点において、*ChU*. VIIの苦の観念と初期仏教の苦の観念との共通性がより強く見出せる。



4. おわりに

以上、*ChU*. VIIを中心として、*Up*に見られる苦の観念とブッダが説いた(四)苦との対応関係について考察した。

苦の観念について、*ChU*. VIIに説かれる苦の観念と四苦との間に一応の対応関係は窺えたが明確な一致は見られなかった。しかし、他の *Up* も含めて当時の「苦」全体を推察すると、そこにはブッダが説いた「苦」に相当するものが既に現れており、両者における「苦」はおおよそ一致すると考えられる。つまり、初期仏教と *Up* は「老」、「死」などを「苦」として捉えていたように、「苦」に関してある程度共通する観念を持っていたと思われる。その上で *ChU*. VIIにおける苦の観念は「病氣」について言及されている点で、他の *Up* における苦の観念よりもブッダが説く苦との共通点が多く、ここに初期仏教との近似が見られる。また、仏教における苦の観念が四苦として定型化するまでの過程を遡ることで、*Up* の苦の観念との類似性をより顕著に見出し得る。⁵⁰特に A.N. IIIにおける苦の観念は、*Vinaya*, Iにおけるそれよりも *ChU*. VIIとの共通性が見出しやすいのである。この両思想間の苦の観念の対応関係から、その変遷の過程が辿れるのではないだろうか。このように、*ChU*. VIIを手がかりとして推察される、*Up* で理想とされるアートマンの知によって到達する境地と、ブッダが望み、仏教において理想とされる苦の消滅は、完全に一致するものではないにしろ、関連性が見られる。

さて、以上のような理想とする境地の達成手段についても *Up* と初期仏教の共通性を見出すことができる。*ChU*. VII, 24, 1⁵¹では理想とする「豊富」の状態について「そこにおいて他の

ものを見ず、他のものを聞かず、他のものを認識しない、それは豊富である」と説かれる。これについてシャンカラ^④は「しかし、この場合、思うことも言われていると見るべきである」と述べ、この見る、聞く、認識するの表現中に「思う (√man)」も含まれているとする。このように、理想の境地の表現にあたり、見る、聞く、思う、認識することの否定表現が用いられることは仏教聖典においても見られることである^④。Up のこの表現は基本的には、例えば「見られることなく見る者であり、聞かれることなく聞く者であり、思われることなく思う者であり、認識されることなく認識する者である (BĀU. III, 7, 23)」というような、宮坂 [2002] に述べられるところの「純粹主観としてのアートマン」を説くものであり、渴愛の対象となるものへの知覚を否定する初期仏教の表現との間には根本的な思想の違いがある。しかし、ChU. VII のこの表現のように、Up には純粹主観としてのアートマンを説くのと異なる用法もある。この両思想における、いわゆる「見聞覚知」の表現の関連性については、紙幅の関係上、別稿をもって論じることとしたい。

・キーワード

Chāndogya Upaniṣad、*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad*、*Vinaya*、*Aṅguttara Nikāya*、*Suttanipāta*、ウパニシャッド、初期仏教、ブッダ、シャンカラ、苦

略号と参考文献

○ 一次資料

[ChU] *Chāndogya-Upaniṣad*

[ChU.Bh] *Chāndogya-Upaniṣad-bhāṣya*

[BĀU] *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad* (Kāṇva-Recension)

[BĀU.Bh] *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad-bhāṣya*

- ・ *Chāndogyopaniṣat : Ānandagirikṛtāṭhikāsaṃvalitaśāṅkarabhāṣyasametā* (Ānandāśrama Sanskrit Series vol. 14), Āgāṣe Kāśināthaśāstrī, Puṇyākhyapattane: Ānandāśramamudrṇalaye, 1934
- ・ *Eighteen Principal Upaniṣads*, ed. V. P. Limaye and R. D. Vadekar, Poona, Vaidika Saṃśodhana Maṇḍala, 1958
- ・ *Ten Principal Upaniṣads With Śāṅkarabhāṣya* (Works Of Śāṅkarācārya In Original Sanskrit Vol. 1), Delhi: Motilal Banarsidass, 2015

[Sn] *Suttanipāta*

- ・ *Suttanipāta*, Pali Text Society, 1990
- ・ *Paramatthajotikā*, Pali Text Society, 1990

[Vinaya] *Vinaya*

- ・ *Vinaya-Piṭakam*, Pali Text Society, 1964

[A.N] *Aṅguttara-Nikāya*

- ・ *Aṅguttara-Nikāya*, Pali Text Society, 1989

○ 二次資料

- Arthur Anthony Macdonell and Arthur Berriedale Keith: *Vedic index of names and subjects vol. I II*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1967
- Johannes Bronkhorst
[2011] *Buddhism In The Shadow Of Brahmanism*, Brill
- Margaret and James Stutley: *A dictionary of Hinduism: its mythology, folklore, and development 1500 B.C.-A.D. 1500*, Routledge & K. Paul, London, 1977
- Patrick Olivelle
[1998] *The Early Upaniṣads*, Oxford University Press
- Richard Gombrich
[2009] *What the Buddha Thought*, Equinox
- S. Radhakrishnan
[2012] *The Principal Upaniṣads edited with introduction, text, translation and notes*, Harper Collins Publishers
- Som Raj Gupta
[2001] *The Word Speaks to the Faustian Man vol. 4 Chāndogya Upaniṣad*, Motilal Banarsidass, Delhi
[2008] 同 vol. 5 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad (Part-1,2)*
- 阿部慈園
[2000] 『原典で読む 原始仏教の世界』東京書籍
- 荒牧典俊、本庄良文、榎本文雄
[2015] 『スッタニパータ [釈尊のことば]』講談社
- 今西順吉
[1979] 「「チャンドーギヤ・ウパニシャッド」第七章の研究」『北海道大学文学部紀要』27 (2)、北海道大学文学研究科、pp. 1~37
- 岩本裕
[2013] 『【原典訳】ウパニシャッド』筑摩書房
- 宇井伯寿
[1982①] 『印度哲学研究 第三』岩波書店
[1982②] 『印度哲学研究 第四』岩波書店
- 梶山雄一
[2013] 吹田隆道編『仏教思想史論』梶山雄一著作集第1巻、春秋社
- 金倉圓照
[1980①] 『シャンカラの哲学 上』春秋社
[1980②] 『シャンカラの哲学 下』春秋社
- 後藤敏文
[1996] 「Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦」『印度学仏教学研究』44 (2)、日本印度学仏教学会、pp. 887-879
[2009] 「「業」と「輪廻」-ヴェーダから仏教へ-」『印度学仏教学研究』(24)、北海道印度学仏教学会、pp. 16~41
- 阪本（後藤）純子
[2015] 「生命エネルギー循環の思想 -「輪廻と業」理論の起源と形成-」龍谷大学現代インド研

究センター

- ・ 島岩
[2002]『シャンカラ』清水書院
- ・ 高崎直道
[1991]『インド思想論』法蔵館
- ・ 玉城康四郎
[1980]「原始仏教における苦の考察」『苦』平楽寺書店、pp. 95～200
- ・ 辻直四郎
[1990]『ウパニシャッド』講談社
- ・ 中村元
[1958]『ブッダのことば -スッタニパータ-』岩波書店
[1974]『ゴータマ・ブッダ -釈尊の生涯-』春秋社
[1978]『因果』平楽寺書店
[1980]「苦の問題」『苦』平楽寺書店、pp.1～94
[1981①]『初期のヴェーダーンタ哲学』岩波書店
[1981②]『ブラフマ・スートラの哲学』岩波書店
[1990]『ウパニシャッドの思想』春秋社
[1997]『原始仏教の思想Ⅰ』春秋社
[1998]『原始仏教の思想Ⅱ』春秋社
- ・ 並川孝儀
[2005]『ゴータマ・ブッダ考』大蔵出版
[2010]『構築された仏教思想 ゴータマ・ブッダ縁起という「苦の生滅システム」の源泉』佼成出版社
- ・ 針貝邦生
[2004]『ヴェーダからウパニシャッドへ』清水書院
- ・ 吹田隆道
[2013]『ブッダとは誰か』春秋社
- ・ 細田典明
[1997]「古ウパニシャッドと原始仏教-Bṛhadāraṇyakopaniṣad 3,8との関連を中心にして-」『印度学仏教学研究』45 (2)、日本印度学仏教学会、pp. 92～100
- ・ 前田専學
[1980]『ヴェーダーンタの哲学』平楽寺書店
- ・ 宮坂宥勝
[1958]「原始仏教の食 (ĀHĀRA) と古ウパニシャッドの食物哲学」『高野山大学論叢』2、高野山大学、pp. 1～35
[1959]「ブリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッドとサンユッタ・ニカーヤに関する一考察」『宗教研究』33 (1)、日本宗教学会、pp.70～88
[1998]『仏教の起源』宮坂宥勝著作集第1巻、法蔵館
[2002]『ブッダの教え-スッタニパータ』法蔵館
- ・ 宮元啓一
[2005]『仏教かく始まりき-パーリ仏典「小品」を読む』春秋社
- ・ 村上真完

- [1971] 「アートマンと光の表象 -古ウパニシャッドと原始仏教-」『印度学仏教学研究』20 (1)、日本印度学仏教学会、pp. 110~114
- [1991] 『インド哲学概論』平楽寺書店
- [1993] 「何が真実であるか-ウパニシャッドから仏教へ-」『東北大学文学部研究年報』43、東北大学文学部、pp. 379~328
- ・ 村上真完、及川真介
 - [2009] 『仏のことは註 (四) -パラマッタジョーティカー-』春秋社
 - ・ 湯田豊
 - [2000] 『ウパニシャッド -翻訳および解説-』大東出版社

註

- ① 図は後藤 [1996] に基づく。本稿に合わせて必要な修正を加えた。
- ② ただし、*ChU* が編纂されたであろう時代からは相当な時間の隔たりがあること、またシャンカラは仏教成立以降の人物であること、そして註釈中に彼の不二元論的な思想が垣間見えることにも十分に留意する必要がある。中村 [1990, p. 30] もまたシャンカラ註の重要性を示しつつも「しかしウパニシャッドの原文の原意を解明するためには、シャンカラの註釈を批判的に検討し、また異なった諸見解がある場合には適切な選択をしなければならぬ」と述べている。
- ③ *BĀU*. IV, 4, 25
sa vā eṣa mahān aja ātmājaro 'maro 'mrto 'bhayo brahma | abhayaṃ vai brahma | abhayaṃ hi vai brahma bhavati ya evaṃ veda ||
- ④ *BĀU*. IV, 4, 6~7などで、*amṛta* が「生きている者が死なないこと」ではなく、「一旦死んだ者が再死することなく、従って地上に再生することがない」という意味で用いられる。後藤 [1996, p. 885] 参照。
- ⑤ 仏教では母胎中と誕生時の苦しみや、または老病死をもたらすものであることと対比させて、誕生そのものが苦しみであるとされる。加えて、*Digha-Nikāya*. XIV, 2, 18などで *jāti* が輪廻の中での再生という意味で使われることがあり、そのような箇所では、基本的には生の繰り返しを苦と認識している。後藤 [1996, pp. 883~882] 参照。
- ⑥ 後藤 [1996, p. 881]
- ⑦ *BĀU.Bh*. IV, 4, 25

sa vā eṣa mahān aja ātmājaro na jīryata iti na vipariṇamata ity arthaḥ | amaro yasmāc cājaras tasmād amaro na mriyata ity amaraḥ | yo hi jāyate jīryate ca sa vinaśyati mriyate vā | ayaṃ tv ajatvād ajaratvāc cāvināśi yato 'ta evāmrtaḥ | yasmā janiprabhṛtibhis tribhir bhāvavikārair varjitas tasmād itarair api bhāvavikārais tribhis tatkr̥taiś ca kāmakarmamohādibhir mṛtyurūpair varjita ity etat | abhaya 'ta eva | yasmāc caivaṃ pūrvoktaviśeṣaṇas tasmād bhayavarjitaḥ | bhayaṃ ca hi nāmāvidyākāryaṃ, tatkārya-pratiśedhena bhāvavikārapratīśedhena cāvidyāyāḥ pratiśedhaḥ siddho veditavyaḥ |

実に、このように偉大で不生のアートマンは老いない、歳をとらないとは、変化しないという意味である。そして、死なない [とは]、老いないので、それ故に死なない、つまり死ぬことがないというのが *amara* である。なぜなら、生まれて、そして歳をとるようなもの、そのものは、滅びる、あるいは死ぬからである。しかし、不死 (アートマン) は不生であり、老いない、つまり不滅のものであるから、それ故に正に 不死である。誕生を始めとする三つの状態の変化を免れたので、それ故にまた、他の三つの状態の変化と、それによって為され

た欲望と行為と痴などによる死の本質を免れたもの、というのが趣旨である。これ故に、実に恐れなきである。そして、前で述べられたような特徴があるから、それ故に恐れを免れたものである。そして、恐れとは無知の結果であるから、その〔無知の〕結果の否定と状態の変化の否定によって無知が否定されることが達成されると知られるべきである。

- ⑧ 後藤氏は「不生 (aja)」については mahān aja ātmā が一組の主語であると見なし、これ以外の四語が死後への恐れに直接関連する特殊な形容表現であると捉えている。また、「恐れなき」と「病」の対応関係について、後藤氏は *BĀU* のアートマン論では、この世での出来事としての病、悩みなどはどちらかという副次的な議論対象に留まっていると見なしうとしており。後藤 [1996, p. 879, 註15] において「生-老-死以外の bhaya-, vyādhi-, śoka- の検討はまた別の主題である。各種のテキストに現われる、いわば、苦悩の一覧表（例えば *ChU* VIII 4,1 Sanatkumāra の教説中の jarā-, mṛtyu-, śoka-, sukṛta-, duṣkṛta-）の比較検討からも更なる視点が得られると思われる」と述べている。

- ⑨ *BĀU*. III, 5, 1

atha hainaṃ kaholaṃ kauṣitakeyaḥ papraccha, yājñavalkyeti hovāca | yad eva sākṣād aparokṣād brahma ya ātmā sarvāntaraḥ taṃ me vyācakṣveti | eṣa ta ātmā sarvāntaraḥ | katamo yājñavalkya sarvāntaraḥ | yo 'śanāyāpipāse śokaṃ moham jarām mṛtyum atyeti | etaṃ vai tam ātmānam viditvā brāhmaṇaḥ putraiṣaṇāyāś ca vittaiṣaṇāyāś ca lokaiṣaṇāyāś ca vyutthāyātha bhikṣācaryaṃ caranti | yā hy eva putraiṣaṇā sā vittaiṣaṇā yā vittaiṣaṇā sā lokaiṣaṇā | ubhe hy ete eṣaṇe eva bhavataḥ | tasmād brāhmaṇaḥ pāṇḍityaṃ nirvidya bālyena tiṣṭhāset | bālyam ca pāṇḍityaṃ ca nirvidyātha munih | amaunaṃ ca maunaṃ ca nirvidyātha brāhmaṇaḥ | sa brāhmaṇaḥ kena syād, yena syāt teneḍṛṣa eva | ato 'nyad ārtam | tato ha kaholaṃ kauṣitakeya upararāma ||

- ⑩ *BĀU.Bh.* III, 5, 1

aśitum icchāśanāyā pātum icchā pipāsā | ... śokaṃ moham śoka iti kamaḥ | iṣṭam vastūddiṣya cintayato yad aramaṇam tat tṛṣṇābhibhūtasya kāmabijam, tena hi kāmō dīpyate | mohas tu viparitapratyayaprabhavo 'viveko bhramaḥ | sa cāvidyā sarvasyānar-thasya prasavabijam | ... jareti kāryakaraṇasaṃghātavipariṇāmo valipalitādiliṅgaḥ | mṛtyur iti tadvicchedo vipariṇāmāvasānaḥ | tau jarāmṛtyū śarirādhikaraṇāv atyeti |

食べることを欲しているのが飢えであり、飲むことを欲しているのが渇きである。〈中略〉憂苦を、痴を、憂苦とは欲望である。求められる事物について考えている者にとって喜ばしくないもの、それは渴愛に支配された者にとっての欲望の種である。なぜなら、それによって欲望は燃え上がるからである。一方、痴とは誤った観念から生じるものであり、識別力の不足であり、迷妄である。そしてそれ（痴）は無知であり、一切の無益なものを生み出す種である。〈中略〉老いとは、行為と器官の集合体の変化であり、しわや白髪などの特徴を有するものである。死とは、その停止であり、変化の終わりである。そのような老いと死という、身体を基体とするものを越える。

- ⑪ *ChU*. IV, 15, 1

ya eṣo 'kṣiṇi puruṣo dṛṣyata eṣa ātmeti hovāca | etad amṛtam abhayaṃ etad brahmeti | tad yady apy asmin sarpir vodakaṃ vā siñcati vartmani eva gacchati ||

- ⑫ *ChU.Bh.* IV, 15, 1

etad amṛtam amaraṇadharṃy avināśyata evābhayaṃ yasya hi vināśāśaṅkā tasya bhayopapattis tadabhāvād abhayaṃ ata evaitad brahma bṛhad anantam iti |

それは不死である。死なない特性を有する者は、正に不滅であるから、恐れなきものである。実に、滅亡する恐れがあるものには、恐れが発生がある。それ（滅亡する恐れ）が非存在であるから恐れない。正に、それ故にそれはブラフマンであり、广大で終わりのなきものである。

⑬ ChU. VIII, 1, 5

nāśya jarayaitaj jiryati na vadhenāśya hanyate | etat satyaṃ brahmapuram asmin kāmāḥ samāhitāḥ | eṣa ātmāpahatapāpmā vijaro vimṛtyur viśoko vijighatso 'pipāsaḥ satyakāmaḥ satyasamkalpaḥ |

⑭ 湯田 [2000, p. 646]、岩本 [2013, p. 168]

⑮ ChU.Bh. VIII, 1, 5

asya dehasya jaravaitad yathoktam antarākāśākhyam brahma yasmin sarvaṃ samāhitam na jiryati dehavan na vikriyata ity arthaḥ | na cāśya vadhena śāstrādigh-ātenaitad dhanyate yathākāśam kim u tato 'pi sūkṣmataram aśabdam asparśam brahma dehendriyādidoṣair na spṛśyata ity arthaḥ | ... apahatapāpmā | tathā vijaro vigatajaro vimṛtyuḥ ca | tad uktaṃ pūrvam eva na vadhenāśya hanyata iti | kimarthaṃ punar ucyate | yady api dehasaṃbandhibhyām jarāmṛtyubhyām na saṃbadhyate 'nyathāpi saṃbandhas tābhyām syād ity āśaṅkānivṛttyartham | viśoko vigataśokaḥ | śoko nāmeṣṭādiviyoganimitto mānasaḥ saṃtāpaḥ | vijighatso vigatāśanecchaḥ | apipāso 'pānecchaḥ | ... satyā avitathāḥ kāmā yasya so 'yam satyakāmaḥ | vitathā hi saṃsāriṇām kāmāḥ | īśvarasya tadviparītāḥ | tathā kāmahetavaḥ saṃkalpā api satyā yasya sa satyasamkalpaḥ |

その、身体の、老いによって、それは、前述の、そこにおいて一切が含まれているような、内部の虚空であるブラフマンは、老いない、身体の如くには変化しないという意味である。そしてその殺害によって、刀などによる殺害によって、それは殺されない。虚空のような、より微細な、言葉で表せない、触れられないブラフマンを、身根などの欠陥によって触れられることはないという意味である。〈中略〉悪が打ち払われた。その者において正義と不正と呼ばれる諸々の悪が打ち払われた。そういう者が悪が打ち払われた者である。同様に、不老で、老いを離れた、そして不死である。正にそのことが前に述べられた。「その殺害によって殺されない」と。何のために再び述べられるのか。もし、〔ブラフマンが〕身体に結びついていて老いと死と結びつけられないとしても、他の方法によって、それら二つとの結合が生じるだろうという疑いを取り除くためである。憂苦のない、憂苦を離れたものである。憂苦とは、求められたものなどに〔手が〕届かないことを原因とする心の苦痛である。飢えることがない、食物を欲することから離れた。渴くことがない、飲み物を欲することがない。〈中略〉真実の、つまり虚偽ではない欲望を有するもの、それがこの真実の欲望を有するものである。なぜなら、輪廻する者たちの欲望は虚偽だからである。自在者にとっては、その逆のものである。同様に、〔真実の〕欲望を原因とする意図もまた真実であり、それを有するもの、それが真実の意図を有するものである。

⑯ ChU. VIII, 4, 1

atha ya ātmā sa setur dhṛtir eṣaṃ lokānām asaṃbhedāya | naitaṃ setum ahorātre tarata na jarā na mṛtyur na śoko na sukṛtam na duṣkṛtaṃ | sarve pāpmāno 'to nivartante | apahatapāpmā hy eṣa brahmalokaḥ ||

⑰ ChU.Bh. VIII, 4, 1

ata evainaṃ na jarā tarati na prāpnoti | tathā na mṛtyur na śoko na sukrtaṃ na duṣkrtaṃ sukrta-duṣkrte dharmādharmau | prāptir atra taraṇaśabdenābhipretā nāti-kramaṇaṃ | kāraṇaṃ hy ātmā | na śakyaṃ hi kāraṇātikramaṇaṃ kartuṃ kāryeṇa | ahorātrādi ca sarvaṃ sataḥ kāryam | anyena hy anyasya prāptir atikramaṇaṃ vā kriyeta | na tu tenaiva tasya | na hi ghaṭena mṛtprāpyate 'tikramyate vā |

正にそれ故に、それ（アートマン）を老いは越えない、つまり到達しない。同様に、死、憂苦、善行、悪行は〔越え〕ない。善行と悪行とは、正義と不正である。到達とは、ここでは越えるという言葉によって意味されるものであり、超越することがないということである。なぜなら、アートマンは原因だからである。なぜなら、結果が原因を超越することはできないからである。そして、昼と夜など、一切は有なる〔アートマン〕の結果である。実に、他のもの（X）によって、他のもの（Y）の到達あるいは超越することが為されるかもしれないが、正にそれ（X）によってそのもの（X）の〔到達あるいは通り抜けること〕は為されないからである。例えば、粘土は壺によって到達される、あるいは通り抜けられることはないのである。

- ⑬ 「正義と不正 (dharmādharma)」は *ChU. VII* にも見られる。これをシャンカラ (*ChU.Bh. VII, 7, 1*) は「聖典で実証されたもの (śāstrasiddhau)」としている。

- ⑭ *ChU. VIII, 7, 1*

ya ātmā apahatapāpmā vijaro vimṛtyur viśoko vijighatso 'pipāsaḥ satyakāmaḥ satyasamkalpaḥ so 'nveṣṭavyaḥ sa vijijñāsītavyaḥ | sa sarvāṃś ca lokān āpnoti sarvāṃś ca kāmān yas tam ātmānam anuvidya vijñānātīti ha prajāpatir uvāca ||

- ⑮ シャンカラはこれらについて前述と大きく変わることは述べていない。

- ⑯ *ChU. VII, 1, 3*

so 'haṃ bhagavo mantravid evāsmi nātmavit | śrutaṃ hy eva me bhagavaddṛṣebhyas tarati śokam ātmavid iti | so 'haṃ bhagavaḥ śocāmi | taṃ mā bhagavañ chokasya pāraṃ tārayatv iti |

- ⑰ *ChU.Bh. VII, 1, 1*

na sato 'rvāgvikāralakṣaṇāni tattvāni nirdiṣṭānīty atas tāni nāmādīni prāñāntāni krameṇa nirdiṣya tadvāreṇāpi bhūmākhyam niratīśayam tattvaṃ nirdekṣyāmīti śāk-hācandradarśanavad itimaṃ saptamaṃ prapāṭhakam ārabhate |

〔*ChU. VI*では〕実在について、此岸的な変異を特徴とする諸々の真実が示されたのではない。というわけで次に、名称を始めとし、生気を終わりとするそれら〔の諸々の真実〕を順に示し、それによってまた、豊富という名の最高の真実を示そう。というわけで、月を指す指を見るようなものであるこの第七章を始める。

- ⑱ Nārada: ① “the name of mythical seer” in the *Atharva Veda*, ② “conjunction with Parvata as priest of Hariścandra, as teaching Somaka Sāhadevya and as anointing Āmbaṣṭhya and Yudhāṃśrauṣṭi” in the *Āitareya Brāhmaṇa*, ③ “teacher” in the *Maitrāyaṇī Saṃhitā*, ④ “a pupil of Bṛhaspati” in the *Sāmavidhāna Brāhmaṇa*. (*Vedic index of names and subjects* vol. I, p. 445)

- ⑳ このサナット＝クマールは *ChU. VII, 26, 2* においてスカンダ (skanda) と呼ばれる。A *dictionary of Hinduism* によるとスカンダは「軍神 (The god of war)」を意味する言葉であり、これによりサナット＝クマールはクシャトリヤであるとされる。けれども、*ChU. VII* ではそこまでの意味は見出せない。シャンカラは「最高の修行者であり、最も神聖な者 (yogīśvara brahmiṣṭha)」と解釈している (*ChU.Bh. VII, 1, 1*)。また、宇井 [1982①, pp. 126～128] によって梵天

サナンクマール (Sanan̄kumāra) との関連性が指摘されており、今西 [1979, p. 28] はそれを受けてサナット=クマールは「仏教などとも思想的に近く、ヨーガ的修行を重んじている」人物であると推測している。

- ㉔ リグ・ヴェーダ (ṛg-veda)、ヤジュル・ヴェーダ (yajur-veda)、サーマ・ヴェーダ (sāma-veda)、アタルヴァ〔・ヴェーダ〕 (ātharvaṇa)、伝説や古譚 (itihāsapurāṇa)、ヴェーダの中のヴェーダ (vedānām veda)、祖霊祭 (pitrya)、算術 (rāsi)、占卜術 (daiva)、年代術 (nidhi)、討論術 (vākovākya)、処世術 (ekāyana)、神の知識 (devavidyā)、ブラフマンの知識 (brahmavidyā)、精霊の知識 (bhūtavidyā)、兵法の知識 (kṣatrayidyā)、天体の知識 (nakṣatravidyā)、蛇とその群れの知識 (sarpadevajanaividya) の18種。当時はこの18種が権威ある学問とされていたのであろう。18 (ないし14) 種の学問を権威あるものとして設定する思想については宇井 [1982②, pp. 428~470] に詳しい。

- ㉕ ChU. VII, 26, 1

tasya ha vā etasyaivaṃ paśyata evaṃ manvānasyaivaṃ vijānata ātmataḥ prāṇa ātmata āśātmatāḥ smara ātmata ākāśa ātmatas teja ātmata āpa ātmata āvirbhāvatirobhāvāv ātmato 'nnam ātmato balam ātmato vijñānam ātmato dhyānam ātmataś cittam ātmataḥ saṃkalpa ātmato mana ātmato vāg ātmato nāmātmato mantrā ātmataḥ karmāṇy ātmata evedaṃ sarvaṃ iti ||

実に、このように見て、このように思っていて、このように認識するその者のアートマンから生気が〔生ずる〕、アートマンから希望が、アートマンから記憶が、アートマンから虚空が、アートマンから熱が、アートマンから水が、アートマンから顕現と消滅の二つが、アートマンから食物が、アートマンから力が、アートマンから認識が、アートマンから熟慮が、アートマンから心が、アートマンから意図が、アートマンから意が、アートマンから言語能力が、アートマンから名称が、アートマンから諸聖句が、アートマンから諸々の行為が、実に、アートマンからこの一切が〔生ずる〕。

- ㉖ 中村 [1990, p. 343] は、「[1] 当時までの諸思想・諸原理についての段階的位置づけがなされている。[2] これらの諸思想・諸原理を一概に排斥しないで、それらの段階的意義、部分的真理性を承認している。[3] 最高原理の立場は、それらをすべて包容し、生かすものである。この立場を徹底すると、異端でさえも生かされることになる」と述べ、これは後代のヴェーダーンタ哲学などに継承される思惟方法であるとしている。

- ㉗ なお、ここではこれまでの教説には出てこなかった「顕現と消滅 (āvirbhāva-tirobhāva)」が説かれる。シャンカラの註釈には「実在するアートマンを知るより前では、自身のアートマンとは別の存在から、生気に始まり名称に終わるものの発生と消滅が存在した (prāk sadātmavijñānāt svātmano 'nyasmāt sataḥ prāṇāder prāṇāder nāmāntasyotpattipralayāvabhūtām)」とあるため、アートマン→生気→希望→記憶→虚空→熱→水→(顕現と消滅→) 食物→力→認識→熟慮→思→意図→意→言語能力→名称→諸聖句→諸々の行為の一連の流れにおける、各項目の顕現と消滅を表しているとも理解できるが、定かではない。

- ㉘ ChU. VII, 26, 2

tad eṣa ślokaḥ |

na paśyo mṛtyuṃ paśyati na rogaṃ nota duḥkhatām |

sarvaṃ ha paśyaḥ paśyati sarvaṃ āpnoti sarvaśaḥ | iti |

- ㉙ *Brahmasūtra*. I, 3, 8~9の註釈において、シャンカラはChU. VIIで説かれる豊富は「最高我 (paramātmān)」(訳語は金倉 [1980①, pp. 199~207] より) のことであると解釈している。な

お、*Brahmasūtra*. I, 3, 8~9自体では、豊富はブラフマンであるとされる。*Brahmasūtra* はブラフマンについての考究が為される文献であるため、最高我と関連づけてそのように解釈しているのであろう。けれども *ChU*. VIIのみで見ると、豊富はアートマンであるということは読み取れるが、ブラフマンであると明言されているわけではない。また *ChU*. VIIはアートマンの教説を求める内容であるため、豊富をブラフマンと捉えるのは難しいように思われる。

③① *ChU.Bh.* VII, 26, 2

kiñca tad etasminn artha eṣa śloko mantro 'pi bhavati | na paśyaḥ paśyatiti paśyo yathoktadarśi vidvān ity arthaḥ | mrtyum maraṇaṃ rogaṃ jvarādi duḥkhatām duḥkhabhāvaṃ cāpi na paśyati | sarvaṃ ha sarvaṃ eva sa paśyaḥ paśyat ātmānam eva sarvaṃ tataḥ sarvaṃ āpnoti sarvaśaḥ sarvaprakārair iti |

③② *ChU.* VIII, 4, 2

tasmād vā etaṃ setuṃ tīrtvā andhaḥ sann anandho bhavati | viddhaḥ sann aviddho bhavati | upatāpī sann anupatāpī bhavati |

それ故に、この隔壁(=アートマン)を超えたとき、盲目である人は盲目でない人となる。傷つけられた人は傷つけられていない人となる。病に苦しんでいる人は病に苦しまない人となる。

ChU.Bh. VIII, 4, 2

tathopatāpī rogādyupatāpavān sann anupatāpī bhavati |

同様に、病に苦しんでいる人、病氣などで苦しむ人は病に苦しまない人となる。

③③ *BĀU.* IV, 4, 14

ihaiva santo 'tha vidmas tad vayaṃ na ced avedir mahati vinaṣṭiḥ | ye tad vidur amṛtās te bhavanty athetare duḥkham evāpiyanti ||

実に、この世に存在しているそのときに私たちはそれ(*BĀU.* IV, 4におけるアートマンの教説)を知る。そうでないならば、無知という大きな損失がある。そのように知る者たちは、彼らは不死となる。しかし、反対の者たちは苦しみにのみ到達する。

ここでの *duḥkha* は「不死 (*amṛta*)」の逆の意味で使われているので、輪廻することによって生じる苦であると思われる。なお、シャンカラ (*BĀU.Bh.* IV, 4, 14)はこの *duḥkha* を「誕生と死などを特徴とするもの (*janmamaraṇādilakṣaṇam*)」と解釈している。

③④ 中村 [1980, p. 14] は *BĀU.* IV, 4, 14に現われる *duḥkha* を挙げ、これについて「ヴェーダ聖典一般の思想に反逆している部分である」と述べているが、*ChU.* VIIには言及していない。

③⑤ *Vinaya*, I に説かれる初転法輪の教説は、他で説かれるものに比べて古い形を保っていると考えられている。水野 [1996] によると、初転法輪(ここでは、四諦説だけのもの、中道説と四諦説を含むもの、中道説と四諦説と五蘊無我説を含むものを一括して「転法輪経」として扱っている)を説く「転法輪経」は23種類ある。水野氏はこれらを8種(①パーリ(南方上座部に属する)のもの、②五分律における化地部のもの、③四分律における法蔵部のもの、④説一切有部のもの、⑤説出世部の梵文『大事』*Mahāvastu*におけるもの、⑥梵文 *Lalitavistara*におけるもの、⑦「増一阿含」のもの、⑧「過去現在因果経」のもの)に類別し、*Vinaya*. Iを含む①の「転法輪経」と、②、③について、「以上の三者はともに古形を伝えており、中でもパーリのものは、新しい挿入は時にあるとしても、他の部派のものに比して、比較的純粋な形をたもっているようである。(同 [1996, p. 258])」と述べている。

③⑥ *Vinaya*, I, 6, 18 (cf. *Samyutta-Nikāya*, V, 12, 2, 1)

idaṃ kho pana bhikkhave dukkham ariyasaccaṃ, jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, vyādhī

pi dukkhā, maraṇaṃ pi dukkhaṃ, appiyehi sampayogo dukkho, piyehi vippayogo dukkho,
yam p' icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ, saṃkhittena pañc' upādānakkhandhā pi
dukkhā ||

③⑦ ChU.Bh. VII, 24, 1

tasmāt saṃsāravayavahāro bhūmni nāstīti samudāyārthaḥ |

それ故に、輪廻の振る舞いは豊富においては無いというのが全体的な意味である。

③⑧ 後藤 [1996] の表に倣って、筆者が作成。

③⑨ A.N. III, 38 (A.N. III. *Tikaṇipāṭa*, 4. *Devadūta-vaggo*, 8)

tassa mayhaṃ bhikkhave evarūpāya iddhiyā samannāgatassa evarūpena ca accantasū-
khumālena etad ahoṣi : assutavā kho puthujjano attanā jarādhammo samāno jaraṃ
anatito paraṃ jīṇaṃ disvā aṭṭiyati harāyati jigucchati attānaṃ yeva atisitvā | aham pi
kho 'mhi jarādhammo jaraṃ anatito, ahañ c' eva kho pana jarādhammo samāno jaraṃ
anatito paraṃ jīṇaṃ disvā aṭṭiyeyyaṃ harāyeyyaṃ jiguccheyyaṃ | na me taṃ assa
paṭirūpan ti | tassa mayhaṃ bhikkhave iti paṭisañcikkhato yo yobbane yobbanamado so
sabbaso pahiyi |

assutavā kho puthujjano attanā vyādhidhammo samāno vyādhim anatito paraṃ
vyādhitaṃ disvā aṭṭiyati harāyati jigucchati attānaṃ yeva atisitvā | aham pi kho 'mhi
vyādhidhammo vyādhim anatito, ahañ c' eva kho pana vyādhidhammo samāno vyādhim
anatito paraṃ vyādhitaṃ disvā aṭṭiyeyyaṃ harāyeyyaṃ jiguccheyyaṃ | na me taṃ assa
paṭirūpan ti | tassa mayhaṃ bhikkhave iti paṭisañcikkhato yo ārogye ārogyamado so
sabbaso pahiyi |

assutavā kho puthujjano attanā maraṇadhammo samāno maraṇaṃ anatito paraṃ
mataṃ disvā aṭṭiyati harāyati jigucchati attānaṃ yeva atisitvā | aham pi kho 'mhi
maraṇadhammo maraṇaṃ anatito, ahañ c' eva kho pana maraṇadhammo samāno
maraṇaṃ anatito paraṃ mataṃ disvā aṭṭiyeyyaṃ harāyeyyaṃ jiguccheyyaṃ | na me taṃ
assa paṭirūpan ti | tassa mayhaṃ bhikkhave iti paṭisañcikkhato yo jīvite jivitamado so
sabbaso pahiyi ti |

④⑩ 中村 [1974, p. 70]

④⑪ 紙幅の関係上、本稿では A.N. までしか触れられなかったが、ブッダの苦の観念についてさらに遡ると、*Suttanipāṭa* (以下 Sn), III, 8において「老」と「死」の克服が説かれる。

Sn. III, 8, 8

Evam abbhāhato loko maccunā ca jarāya ca, tasmā dhirā na socanti veditvā
lokapariyāyaṃ ||

このように、世間は死と老いによって害されている。それ故に、賢い者たちは世間の成り
行きを知っても悲しまない。

ここには「病」は見られないが、前述の通り「老」と「死」は *BĀU*、*ChU* において共通して
見られる苦の観念である。また、これらの苦の克服のために「憂い (soka)」を越えることを説
いており (Sn. III, 8, 20)、その点は *ChU*. VII と共通する。

また、*Paramatthajotikā* (以下 Pj), VIII, 588 (Sn. III, 8, 15に対する註釈) では世間において
思い通りにならないことの例として「死」と「病」の言及がある。

Pj. VIII, 588

vena venā ti yenākārena maññanti : 'dighāyuko bhavissati, aroga bhavissati' ti, tato tam

aññathā yeva hoti, so evaṃ maññito marati pi rogī pi hoti |

どれだけとは、どのような在り様によって、「長寿でありますように。無病でありますように」と思っても、実にそれとは異なるものになる。このように思われた彼は死にもし、病気にもなる。

④② ChU. VII, 24, 1

yatra nānyat paśyati nānyac chṛṇoti nānyad vijānāti sa bhūmā | atha yatrānyat paśyaty anyac chṛṇoty anyad vijānāti tad alpam | yo vai bhūmā tad amṛtam | atha yad alpam tan martyam | sa bhagavaḥ kasmin pratiṣṭhita iti | sve mahimni yadi vā na mahimniti ||

そこにおいて他のものを見ず、他のものを聞かず、他のものを認識しない、それは豊富である。一方、そこにおいて他のものを見て、他のものを聞き、他のものを認識する、それは僅少である。実に、豊富であるものは不死のものである。しかれば、僅少なものは死すべきものである。

(ナ)「尊師よ。それ（豊富）は何を拠り所としているのか」と。

(サ)「自分自身の偉大さにおいてか、又は〔自身の〕偉大さにおいてでない場合もある」と。

④③ ChU.Bh. VII, 24, 1

kiṃlakṣaṇo 'sau bhūmety āha - yatra yasmin bhūmni tattve nānyad draṣṭavyam anyena karaṇena draṣṭānyo vibhakto dṛśyāt paśyati | tathā nānyac chṛṇoti | nāmarūpayor evāntarbhāvad viṣayabhedasya tadgrāhakayor eveha darśanaśravaṇayor grahaṇam anyeṣāṃ copalakṣaṇārthatvena | mananaṃ tv atroktaṃ draṣṭavyaṃ nānyan manuta iti | prāyaśo mananapūrvakatvād vijñānasya | tathā nānyad vijānāti | evaṃlakṣaṇo yaḥ sa bhūmā |

その豊富は何を特徴とするのか、と彼は言った。もし、豊富という真実があるとき、他のものを、他の手段（感覚器官）によって見られるべきものを、見られるべきものから分離された、別の見る者は、見ない。同様に、他のものを聞かない。実に、個々の対象は名称と外見の内側にあるから、それ（個々の対象）を捉えるもの、ここでは、見ることと聞くことのみ言及がある。そして、それ以外（触覚、嗅覚、味覚）〔の言及〕は、比喩的表現の対象による。しかし、この場合、思うことも言われていると見るべきである。「他のものを思わない」というようにである。一般に、思考は認識に先行する性質があるから。同様に他のものを認識しない。このように特徴付けられた者、彼は豊富である。

vi-√jñā と √man は ChU. VII においてそれぞれ VII, 3 と VII, 7 で説かれ、vijñāṇa の方が manas よりも偉大であるとされる。間に saṃkalpa, citta, dhyāna を挟みつつ、vijñāṇa の方がより根源的な段階の位置づけが為されている。シャンカラは manas を「考えることによって限定された内的器官 (manasyanaviśiṣṭam antaḥkaraṇam)」とし、vijñāṇa を「聖典の意味を対象とする識 (śāstrārthaviṣayaṃ jñānam)」としている。

④④ 古ウパニシャッドではこの他にも見聞覚知を用いた表現が見られる (BĀU. III, 4, 2, 7, 23, 8, 11, ChU. VII, 9, 1, Praśna.Up. IV, 9)。これについて宮坂 [2002, pp. 420～422] は BĀU. III と Sn. V においてそれぞれ見られるこの表現に着目し、その教説を比較した。結果として、両者は類似の表現ではあるけれども、アートマンを説くウパニシャッドと無我を説く仏教との基本的な立場の違いがあるとしている。